

新刊紹介

Richard Honigswald, Philosophie und Sprache. (Basel 1937)

ヘーニヒスワルトについては更めていふこともない。彼は今年言語哲學に關して右の様な本を出した。言語哲學は「言語の概念の學」であり、あらゆる實證的な言語諸科學に先行すべきものであるといふ。この論據の上に立つ論旨の中心をなすものはモナスの思想である。「言語はモナスの性質のものである。」このモナスは「無意識モナス」として自己の中にそれ／＼本來の活動を含むものである事を意味すると共に、それらが更に一の豫定調和の下にある事を意味してゐるのではないかと思はれる。言語はその内部要素間においても外的(相互間)にもモナス的關係にある。——言語の哲學において永く顧みられなかつたライニンニツの單子論を新に取り入れて、之をマンボルト的(Leibniz—epistémologique)立場に調和せしめんとしたものであつて、全體は *humanbildender Leibnizismus* といふのであるからか。叙述は非常に平明である。少くもその前著 *Grundlagen der Denkpsychologie* (1921) より通達であり、シュテンツェルの有名なほどには實の伴はない「言語の哲學」より一貫的である。新しい考へとしては右の *Sprachmonas* の外、言語における一と多の問題に對す

る「考へ方」(解決ではない)、距離 *Abstand* の考へ(これはマンボルトにおいて極めて *implicit* にあらはれて居りながらもその言語哲學の重要な概念である) など。——全體としてはこの人一流の手堅い組織であるが、それだけに言語の哲學としてはあまり言語を靜的外的に取扱ひすぎてゐる様である。マンボルトにおける様に、人性の中なる *fern-dunkler Abgrund* の前に我々をして慄然佇立せしむるやうなところはない。しかしこれは思辨的よりもむしろ技術的な最近の言語の哲學一般の特徴であり、かれは獨逸觀念論時代のものの特質である。

(一九三七・十二・泉井久之助)

新刊書目

Hegel: *Phänomenologie des Geistes*. 4. Aufl. (nach dem Text der Originalausg.) mit neuer Einleitung hrg. v. Joh. Hoffmeister. (Werke. Bd. 2 Lpz.: F. Meiner, 1937. xiii, 598 pp. geb. M. 9.80.)

Hegels Vorlesungen über die Geschichte der Philosophie. Kritische Neuansg. hrg. v. Joh. Hoffmeister. (Werke. Bd. 15-17) Lpz.: F. Meiner. In etwa 10 vierteiljählichen Lfg. zu je M. 5.—

Nicolaus de Cusa: *Opera omnia*. *Issu et auctoritate Acad.*